
中村和弘

2025年12月号

<咀嚼音>

水族館にて三句

深海鮫の巨眼に視られ秋ふかむ
小判鮫自ら泳ぎ秋澄めり
呼吸孔のほかは動かず巨大饋
黒々と杉の銚立ち天高し
乳牛の咀嚼音のみ冬に入る
冬キャベツ隆々として慈恩なり
金色（こんじき）の波夷羅（はいら）の目有り冬の闇

陸・この20句 中村和弘選

2025年12月号

花カンナ下着の痰の散るごとし 瀬間 陽子
ポケットに工具ふくらむ秋日和 佐藤 禎子
電線に葛蔓おもく血縁濃し 石川 真木子
多摩川の中洲乾きて秋暑し 小竹 ヒサ子
秋暑し茶筌ゆらめく海の底 十亀 カツ子
蔵書印のうすれをなぞり秋深む 上田 桜
朝シャンと言う時代あり髪洗う 荒堀 かおる
濡れ肌の鳩吹く風にすぐ乾く 秋元 道子
大雨の前の静けさ昼の虫 大瀬 響史
葉月果つ日照雨は銀に窓を打ち 今田 克
立石寺の町に銜す威銃 根岸 三恵子
精霊ばった草よりあおく睦みをり 安住 正子
遠雷や取つてはならぬ黒電話 藤川 夕海
とんぼうの影飛ぶ日だまりの廊下 古川 章雨
西瓜切る北極点の辺りより 桜田 花音
古書店の一隅の辞書夏の果 荒川 昌子
花びらを洗う妻の手菊臈 村越 正信
双眸の骨の化身や親子鹿 内海 新
有難き月の兎や波静か 小田 桐妙女
盂蘭盆会肌にほのかな火の匂ひ 清水 りま

大石雄鬼

2025年12月号

<芋嵐>

蜻蛉の明るさとなり子と話す

秋の灯のつるつるとして三國志

母はまだ母にとどまり芋嵐

文庫本ひらきすぎたるハロウイン

太刀魚が夜を丸のみしてもぐる

次の世へ斜めに立ててゐる熊手

梟は平和の盛りすぎてゐる

中村和弘

2025年11月号

<俵>

潮目には芥つらなり晩夏かな
廃屋の中まで藪ぞ十三夜
マリア仏西日の中に寝れおり
大鯉のなにか吐きだし秋暑し
新米の俵の藁も匂いたつ
鬼の子の影白壁に揺れており
猪の内臓どつとあふれて冬近し

陸・この20句 中村和弘選

2025年11月号

立葵夜の主を待つやうに 小菅 白藤
盆の家砥石の凹み著し 浅沼 眞規子
爆音や命あずけし夏の草 岩崎 嘉子
蚯蚓死んで初めて土に横たわる 瀬間 陽子
初嵐ビルの谷間を飛ぶは何 竹内 實昭
原発の街を原始の倭武多往く 牧 ひろし
赤ちゃんの湯気をまとえり玉蜀黍 佐々木 貴子
水やれば鉢よりこぼる子蟻螂 安住 正子
曼荼羅の覚えの顔や小鳥来る 藤川 夕海
竹籤の美しき虫籠細工かな 森池 義子
蛾の骸花と見紛ふうすみどり 宇佐川 うさこ
仕舞ひても路地の何処の祭笛 西村 敏子
寝転んで団扇を腹へ打ち下ろす 佐々木 達治
攀じ上る滝のテラスに赤蝮 伊藤 岳栄
数珠玉や平和の音のかすかなり 石井 節子
死火山や改札口の水中央 北村 美代子
銀漢に向かう光や列車行く 村越 正信
大声に大鯉ざいと秋暗し 小澤 淑子
かけの落雁を足し南瓜煮る 阿部 博子
原爆忌堅い秒針の音ばかり 朴 美代子

大石雄鬼

2025年11月号

<膝裏>

納豆の糸のやうなる神話かな

膝裏のうすくひろがり茸狩る

留守の顔小さく釣瓶落しかな

花崗岩のやうにうつ伏す鴟日和

ハンバーガーショップの頭だけの菊

月光のしがみつきたる紙コップ

萩刈つて袋のやうな父がある

中村和弘

2025年10月号

＜鉤爪（かぎづめ）

黒栄の岩間の蝟を突き刺せり
炎天の給水タンク輝けり
塵埃をはやくも浮べ日向水
日向水玩具のアヒル浮びおり
蟻食の鉤爪大き夏の盛り
廃タイヤ発火しそうに夏の盛り
鉄掲げ蟹の死にいる晩夏なり
節穴の光は濁り晩夏かな
牛の咆哮一頭ならず霧冥し

陸・この20句 中村和弘選

2025年10月号

八月や兜太兜太と口に出る	小菅 白藤
大江丸に名越の巫女の句ありけり	大類 つとむ
かもしかの横顔広し夏の月	瀬間 陽子
子供神輿幽霊街をさまよへる	加藤 明虫
妻恋ふる万葉の歌碑草いきれ	牧 ひろし
アユタヤの寝釈迦に委ね蟻地獄	上田 桜
掲示板に魍魎魍魎の笑う夏	大瀬 響史
向日葵の今日より伸ぶと空青し	今田 克
保護猫の共におりたる端居かな	前塚 かいち
黒光りの網引地蔵懲けむり	根岸 三恵子
鍬洗ふ濁りの中へ蛭寄り来	安住 正子
青空と夕立の境神を見し	古川 章雨
一列に片蔭ゆけり三姉妹	宇佐川うさこ
水無月の朝顔ふるへつつありぬ	山田 和歌子
大志などさらさらなくて鯰捕り	石井 節子
守一の蟻の子孫の使ひかな	松本 清美
ゴムの木の葉陰優しや午睡どき	塩坂 泰子
チボー家のジャック眩しき黴の書架	小長光 吟子
誘蛾灯何れの罪に問はれしか	宮本 としお
容易くは恋に落ちぬと井守かな	佐藤 かほる

大石雄鬼

2025年10月号

<穴>

新茶刈って祖父になりたるままである

包帯のかさなるやうな夏至の夜

穴八幡の穴見っからずシャワー浴ぶ

ヨットの帆のやうなシャツ着てハムレット

夏痩せてステンドグラスの中にある

東京は穴ばかりなる白露かな

ちらほらと顔の剥がれて葡萄喰ふ

中村和弘

2025年9月号

<九十九里>

時刻表かくまで密に盆に入る
涎引く耕牛おらず終戦日
牛の貌藪より突き出炎暑かな
九十九里乗馬せしまま馬冷す
蛤の稚貝満ちたる渚かな
ワイヤーの弛ゆるさず秋暑し
風鈴の釘痕のこり父母の亡し

陸・この20句 中村和弘選

2025年9月号

夏夕べ塀の隙より犬の鼻 浅沼 眞規子
向かうにも俯く二人春の川 大類 つとむ
スケボーの足が飛び来る余花の宙 岩崎 嘉子
雨粒の奏でる音色蓮の花 中村 仿湖
古古古米名称かわゆき薄暑かな 石川 真木子
黍の花遠き山脈隠しけり 小竹 ヒサ子
草引いて墓仙人を起したか 西牟田ふみ子
シャガール展出て万緑を泳ぎ来る 牧 ひろし
夏の窓開ければ生きる音忙し 鎌田 史子
瀬戸内の神々の島滴れり 根岸 三恵子
積乱雲鼻輪が先に水に着く 藤川 夕海
油圧ショベル高く震へて梅雨入かな 吉川 孝子
螢火の飛び去る彼方七つ星 佐々木 達治
紫蘇の苗ただ一本の狭間かな 松浦 廣江
梅雨入りか虹色のハロ輝けり 伊藤 岳栄
子の耳を洗ひし記憶髪洗ふ 松本 清美
四十雀苔らしきもの運びをり 池崎 昌子
校庭に流れ着きたる神の鹿 菅原 千暁
どこからも食み出してゐる梅雨晴間 小田 桐妙女
木の家紐ゆれており夏の夜 三宅 桃子

大石雄鬼

2025年9月号

< 忘れたまま >

白鷺の神話のごとき脚がある

首筋を止まり木にせよ三光鳥

電燈の低く吊るされ鰻喰ふ

いつも眼をのぞきこむ子は日日草

背泳ぎの先の新幹線に乗る

子の頭に忘れたままの夏帽子

模写の絵にかこまれてゐる新豆腐

中村和弘

2025年8月号

<魚籠(ぎょべつ)>

缶詰の乾パン鳴りて大暑かな

白壁の剥れしままに夏椿

蓮咲いて魚籠が餌を奪合う

蓮の花喘ぐがごとく鯉の口

月の輪熊ひたすら走る暑さかな

神殿に汚れハンカチ吹かれおり

蔓薔薇の絡まり昇る処刑の木

陸・この20句 中村和弘選

2025年8月号

朧月夜子規の頭のうしろより 大類つとむ

花仙人掌湖も砂漠も波立てり 瀬間陽子

白藤のトンネルを来て香を忘る 佐藤禎子

田水張る空の窓より綿毛かな 佐々木貴子

夕暮れの校舎を囲む水張り田 大類準一

黄砂の匂ひせし聖観世音 大瀬響史

花櫛妻の失せにし門小さし 今田克

海潮音ときに風音放哉忌 前塚かいち

風止みて波間に消える卯波かな 小保方京司

死の彷徨ありし山見て野遊びす 古川章雨

芍薬の百花の寺を棺出る 吉川孝子

巨船へと新車の列や夏燕 土岐詳恵

初夏や耳のかたちをほめらるる 桜田花音

タケノコの掘るやいなや小蠅くる 伊藤岳栄

蜜吸う子の消えてつつじの垣燃ゆる 小橋めぐみ

オリーブの花をこぼして夏の霧 池崎昌子

万緑や岩を削りて川下り 北村美代子

「芳一っ」と鋭き声や月涼し 中嶋和臣

躁と鬱鸚鵡にありて夏立てり 小長光吟子

戦場へ羽をかくしててんとう虫 朴美代子

大石雄鬼

2025年8月号

<出口>

芭蕉布を出口のやうに着る男
冷麦のもつれてあたり宇宙展
大学のもつとも奥で馬冷やす
雨雲の色のミシンや浴衣縫ふ
水たまりのやうな顔見せ朝曇
太陽のかけらひろげて蚊帳を吊る
妹に大夕焼の入りこむ

中村和弘
2025年7月号
<姫街道>

そうもう

草莽を殺ぎ落したり蟻の塚
蔓薔薇の絡り昇る処刑の水（⇒8月号で誤植修正（水⇒木））
衛兵の人形めきて薔薇の門
樹の瘤の黒々として梅雨ふかむ
神殿に汚れハンカチ吹かれおり
山桃の姫街道に染みており
どろどろと黒南風夜の雨戸うつ

陸・この20句 中村和弘選

2025年7月号

虎杖の芽のたくましき馬の墓 小菅白藤
ふはふはとバレレッスン花の昼 浅沼真規子
若葉から若葉に抜ける風に酔う 永井アイ子
掌がぼつてりとして花の昼 佐藤禎子
コンビニに辿り着きたり春暑し 小竹ヒサ子
春窮は今日か明日か鶏を焼く 上田桜
鬱の字にひび入りさう春の雷 堀尚子
柳絮とぶ行く先どこも敵地なり 渡部洋一
草よりも青き草餅隅田川 猪狩鳳保
水に放つ鹿尾菜小えびの混りをり 根岸三恵子
にはとりの膨れてをりぬ養花天 安住正子
天蓋に虻金色にまみれたり 土岐詳恵
富山より来し紙風船の四角なり 古川章雨
県庁の大路日なかを孕み鹿 吉川孝子
顔に受く雪解の風の重たさよ 清水山梳子
芹洗ふ川砂白く舞ひ上がり 北村美代子
深海魚になりゆく時刻春の雷 松本清美
花冷えの粉飾のなきデスマスク 小長光吟子
鳥帰る翼ひかりを振り落とし つつゐ 怜
百の眼が吾を見透かす紅椿 正木むさを

大石雄鬼

2025年7月号

<砂 鉄>

蜘蛛の囿の頬のごとくに震へをり
しわしわの時間天から五月雨るる
ドライフラワーひろがりし外科診療所
薔薇咲いて砂鉄のやうに母眠る
影の小さな妹抱へくるキャベツ
キャベツ畑に太陽を置き去りす
夏痩せて場外市場に影つよし

中村和弘

2025年6月号

<魚族>

狐畏ふつと見えたり冬日和
牡蠣殻を砕けば庭の矮鶏寄り来
水槽の魚族に視（み）られ春愁う
蝶の羽根しばし食み出し墓の口
繫船に人の体臭春暑し
恐竜の地層を崖につつじ燃ゆ
巡礼の道を濡して卯月波

陸・この20句 中村和弘選

2025年6月号

如月の幽き酸素吸ひて居り 故今田述
ドアノブに触れ春寒を覚へたり 浅沼真規子
踏切をザムザとわたる養花天 瀬間陽子
水深の目盛は赤し鳥帰る 佐藤禎子
ロボットの眼の煙色桜まじ 加藤明虫
春愁や明日廃校のチャイム鳴り 牧ひろし
両側は柱状節理花うぐい 上田桜
倒木に両手を触れて暖かし 堀尚子
除雪車の恐竜の跡残しゆく 大瀬響史
掛軸の雛人形も遺しけり 米川五山子
巣箱みな何処にむけても暗き穴 中村穂
日陰りて蝮が止まってしまひけり 安住正子
春愁の潜む女の鎖骨かな 古川章雨
地平線の原野をゆらす苜蓿 土岐詳恵
朝東風の光の中に魚はねる 森池義子
日本蜜蜂とびかふ路地に迷ひけり 宇佐川うさこ
山の影大きく乗せてチューリップ 佐々木玉枝
呼吸根ひっそり群れて雪解水 北村美代子
筋肉も骨にも名あり梅咲けり 荒川昌子
反戦の色なら雛の緋毛氈 松本清美

大石雄鬼

2025年6月号

<逃水>

蛇穴を出ればゆるくなる眼鏡
逃水の消ゆるところに父がゐる
木の股をたつぷり見てゐる鞆
額縁のなき絵のやうに抱卵す
浅蜷汁北関東のすぐ曇る
火災感知器とほくに鳴つて躑躅咲く
知恵の輪に光の溜まり五月来る

中村和弘

2025年5月号

<風車>

波の舌ひらりひらりと春の雪
億年の地層を崖に山桜
切株の腐臭もまじり桜満つ
谷川岳の絶壁そびえ躑躅燃ゆ
砂漠化の蟻塚のみが巨大なり
発電の風車を照し山火かな
卒業の匂いをまとい娘（こ）のもどる
発火しそうな少女三人春深し
首筋の血管青し孕み鹿
泥土の塩分なめて孕み鹿

陸・この20句 中村和弘選

2025年5月号

あやとりの箒のほろり春満月 瀬間陽子
梅真白すぐ廻り切る回覧板 佐藤禎子
初天神阿吽狛犬仔を抱く 竹内實昭
寒雀獺の耳だけ動きおり 小川葉子
原色女凶鑑雪夜の湯屋の窓 佐々木貴子
雪解風黒く膨るる日本海 牧ひろし
水餅の芯の残れり書の合間 大類準一
半月の恨みや碧し寒戻る 今田克
冬の晴牧水歌碑は富士背負ふ 田中眞青
なだれ雪個々の屋根より響きけり 秋元道子
風船のくせに一本橋を来る 藤川夕海
春寒や土管の太き街の底 土岐詳恵
早春の風は生まれたての匂ひ 桜田花音
鞆声はげししける海より上る河豚 山田和歌子
たちまちに吹雪の底の辺りかな 佐々木玉枝
雪予報外れし昼の間延びかな 小橋めぐみ
樹木葬の草木静かに山眠る 荒川昌子
東風吹かば篠笛の音のよくひびき 小村寿子

アラベスク縞枯山を春の雪 原昇
夕時雨伊根の舟屋に滲む灯 平仲子

大石雄鬼

2025年5月号

<切り傷>

海胆割つて日暮れのやうなものを食ふ
心臓のふっと綺麗に草を摘む
切り傷のやうにももの芽ひらきたる
ものの芽にうなだれてゐる父の影
足の指おとなしくあり磯遊
がたがたな影をひきずり磯遊
はまぐりや一重臉の神が来る

中村和弘

2025年4月号

<黒穂>

くれない

鶏ガラの薄紅に春日かな

L E D ライトに透けて春の蠅

縄文のビーナスも入れ雛まつり

紅梅の咲きたるごとく河馬の口

貝塚を真中にして菜花咲く

徘徊の黒穂を手にし戻りけり

黒潮の怒濤となりて椿満つ

陸・この20句 中村和弘選

2025年4月号

歌舞伎座のあつぱれな罇鏡餅	佐藤禎子
ガラス戸に色の記憶や雪降り来	佐々木貴子
雪達磨だけの予報となりにけり	牧ひろし
冬の雷常緑樹林奥の闇	竹内實昭
目覚めると限らぬ蒲団正しけり	荒堀かおる
色恋や東西南北枯葎	本多洋子
枕辺に恐竜図鑑虎落笛	中村 穂
凍裂の木霊を返す屋敷林	安住正子
藪巻きのどつしり据る後楽園	根岸三恵子
注連明けの大社土俵を弱日かな	吉川孝子
広重の蒲原となる雪の夜	古川章雨
本棚を横目に啜る七日粥	松浦廣江
初糶の港や鳶の低く舞ひ	別所弘子
わが視野の中を歩いて冬の暮	佐々木玉枝
海は今満潮の刻初句会	石井節子
冬青空抱えし遺影傾けて	小橋めぐみ
福藁を敷けば華やぐ躡り口	池崎昌子
白い真昼落葉の上の鳥の影	朴美代子
電極の四方八方花八手	中嶋和臣
魔女めくや陳皮ことこと咳の夜	市川文子

大石雄鬼

2025年4月号

<日暮>

白鳥の割れてはらはら日暮かな
廃棄物置き場の空をいかのぼり
透明な息して涅槃図を見たり
苗木市の端にぐにやりと男立つ
前日の私起きれば小鳥引く
東京の丈のみじかき春の虹
三月を日暮のやうな男来る

中村和弘

2025年3月号

<外炎>

大寒やさらに重石の沈みけり
鼠穴生家にのこり初明り
砲声のごときも混じり春一番
腐葉土の袋積みあげ春立ちぬ
遠足のスマホ画面を出て行けり
落し角青き地球に刺りおり
外炎は見えぬほどなり春朝日

陸・この20句 中村和弘選

2025年3月号

胡桃割る戦の国を見るやうに 小菅白藤
掛け声は花屋で止まる年の市 浅沼真規子
冬満月すべてを浚ひいよよ清む 小竹ヒサ子
直角に舵切る白帆神渡し 十亀カツ子
行き着かぬ鑑真廟の暮れ早し 大野和加子
冬至湯の湯気ただならぬ女神かな 渡部洋一
置物を並べし如き日向ぼこ 牧ひろし
寒糸月妻の小声のガザ古謡 今田 克
つらき日の鎧を脱ぎぬ白障子 中村 穂
アルゴンキンは湖に陸おく紅葉かな 吉川孝子
観音のわずかに動く煤払い 松浦廣江
梟は記紀よりの使者首まはず 山田和歌子
白菜の芯に黄金の輝けり 清水山植子
重く垂れる路地の電線神の留守 荒川昌子
響きくる最終電車の氷る音 藤倉頼江
風邪の眼に遊牧民の確かな掌 三宅桃子
七色の雪も降り積む津軽富士 清水りま
結界か賽の河原か鮭の果て 彩斗十明
手袋に亡き猫の毛が光りをり 小野明子
碧落や橋梁の影湖に凍む 原 昇

大石雄鬼

2025年3月号

<折り目>

太陽のほろりとしたり捕鯨船
天球儀のかたさをたもち寒卵
折り鶴の折り目のやうに湯冷めせり
ドライヤーの口のあはれに雪催
筋肉のなきクリスマスツリー立つ
獅子舞の胸のげつそりして始まる
足小さくして立春の風呂に入る

中村和弘

2025年2月号

<稽古場>

土壤とは人が育てし日の始
濛濛と牛の白息日の始
地吹雪に牛の咆哮まじりおり
荒壁に人日の陽の強さかな
稽古場に初鏡ほか何もなし
初鳥ま白き糞を落し消ゆ
湯豆腐に役者めきたる男女かな

陸・この20句 中村和弘選

2025年2月号

晩年の身の浮きやすき初湯かな 小菅白藤
俯せの甕に雪降る嵐山 大類つとむ
鷺の群ころころにも来る一羽かな 瀬間陽子
満月や釈迦の母乗る白き雲 十亀カツ子
ハロウィンの海たいらかに砂の城 佐々木貴子
瑕跡をそのままにして山眠る 前塚かいち
栗売りの微妙に歪む一軒家 木村詩織
始祖鳥の石に眠るや秋深し 中村穂
こりこりと猫の腰骨冬ぬくし 安住正子
白壁にせわしなき影とんぼ飛ぶ 古川章雨
樹肌には千筋の岐や冬の雨 吉川孝子
霜月や硝子の絵文字うかびたる 土岐詳恵
鳶高し伊良湖に鷹の渡らぬ日 別所弘子
捨てジープ幌にしばしの寒鴉 石井節子
木枯一号藜の杖が受けて立つ 荒川昌子
図書館の跡地背高泡立草 藤倉頼江
墓仕舞喉仏手に秋暮るる 原田勉
白鳥の声の埧塙の八雲句碑 山田恵美子
カプセルの埋まつておりし雪の黙 三宅桃子
クリムトの金をまとひし秋思かな 小長光吟子

大石雄鬼

2025年2月号

<大仏の眼玉>

芭蕉忌の夜空は甘き匂ひかな

心臓の冷たさとなり魚市場

零戦は狐の足をのばしけり

大仏の眼玉のやうに湯冷めせり

寄鍋の具のこびりつく民主主義

大年の涙となりて栞紐

風邪ひいて狐うどんのやうになる

中村和弘

2025年1月号

<宇宙線>

松の影映りめでたき古障子
宇宙線地球つらぬき年新た
土壁のほろりと崩れ木守柿
苔に滑りし大き足跡獵期かな
白狐めく雲を発して小春風
大鯰笑うがごとく川普請
白犀は死火山のよう辛夷咲く

陸・この20句 中村和弘選

2025年1月号

秋霖や煮炊きの跡の河原石	浅沼真規子
目つむれば更に明るし曼珠沙華	中村彷徨
秋灯下戻らぬ本のすきまかな	永井アイ子
白鶴鴿祖母ちりがみのしわのばす	瀬間陽子
北緯四十九度の巨きな夕日鮭跳ねる	十亀カツ子
大仏の腹まで沈む出水川	小木曾あや子
デラシネが棲みつし町赤とんぼ	米川五山子
秋没日走る少女の紅き息	今田 克
栗飯や星の終りの写真見る	西牟田ふみ子
手に肩に擦り寄るインコ夜の長し	根岸三恵子
ひとすじの暗き裂目の通草かな	安住正子
腐木の白凜と一本秋暑し	吉川孝子
しゅろの葉に土星かかりて十三夜	佐々木達治
軍艦島今は蜻蛉の群れ住まふ	阿部雅子
盆の月馬小屋の藁通りけり	北村美代子
屈託は午後に始まりいぼむしり	石井節子
大満月荒野に白色降り注ぐ	長谷川佐知子
一斉に浮く夕暮の赤蜻蛉	内海 新
名月や最古の盃は木の葉にて	小長光吟子
渡り鳥廊下に出るたび寂しくなり	三宅桃子

大石雄鬼

2025年1月号

<化学記号>

図書館の腫れぼつたいぞ時雨来る
化学記号貼りつけ湯冷めしてあたり
瞳といふ落とし穴あり山茶花咲く
心臓にまぎれてあたり冬の鹿
まばたきのすこし強くて白鳥見る
湯冷めして標的となる男あり
股に手を落として十二月八日
